## ■本編〈クイックハルト〉のあらすじ

止されており、 は るかな未来。 か おりに不老不死不滅の属性を持つ者同士による、"クイックハルト"と呼ばれる決闘によって、 人類は生活の場をデータ上の世界、"ドライブスペース"に移していた。 この世界では異世界間 紛争 の 戦 が 争 解 が 決 禁

されている

こと堀越レイアがやってくる。 その結果として、良一と千早の親兄姉が乗る旅客機が完全に消滅してしまう。 平行して存在する世界 る二人。そこへ、ドライブスペースの管理組織から派遣された女性、 の は、 夜、 疾<sup>は</sup>やて 不老不死不滅の存在となっていたのだ 良一はクイックハルトをテレビ観戦中に" 良一は、 二十一世紀前半の日本をモデルとした世界 〈昭和日本〉 近恵は千早と補償交渉を行い、 から移住したばかりの、 N:'-[ " という件名がついたメールを受信したのちに不可思議 〈平成日本〉 圧倒されるほど巨大な胸を持つ少女、 レイアは良一をクイックハルトの闘士へと誘う。 中島近恵と、クイックハルトの女闘士、〈ストレイジーク〉 で暮らす男子高校生。 同じ不幸を共有することで、 ある日彼は、 彩雲千早と知り 急速に いつの 〈平成 な体験をし 親密に 合う。 日本〉 間に か ع 良 そ

った面々で誕生パーティーが開かれる。 直 千早はレストランで給仕の仕事をしていた。 のエヌ〉 後に千早が消える。 件から半年後、二人は と呼ばれる存在の手先と非公式なクイックハルトを行うことになる。その相手とは……。 꽢 旦 〈昭和日本〉 近恵の案内で千早と再会し、 その夜、 で同棲している。良一はクイックハルトの闘士となるべくレイアの元で訓 その日は千早の十七歳の誕生日。 良一が自宅でネット巡回をしていると、またもや不可思議な体験をし、 愛を確かめ合う二人。その後良一は 彼女の勤めるレストランにて、 連の 事件の元凶である 年 を 受け、 知り 合

### #\_quickhalt\_external :

# ロサンゼルスの怪物ふわり

陽光を反射して鈍く輝く銀色の"怪物" が、 悠然と視界にのしかかってくる。

怖れることはない、 彼女は背筋に恐怖を感じながらも、それとは別の理由で傍らの男性の腕にしがみついた。 と男性は優しく彼女に告げてから、 再び" 怪 物, に視線を戻す。

その眼差しが、彼女に向けられることはついになかった。

かつて" 世界の三大怪物, の一つと称されたこともある" それ" を見たことが、 その後の彼女の人生を強烈に

支配することとなる。

「ほら、おばあさま……ご覧になって」

ロングへアーの若い女性が、傍らの老婆にそう告げた。



作

る。

老 婆 は 足 を 止 め ると、 ゆ つ < り ٤ た 動 きで 首 を 動 か し、 海 を 見る。

そ 0 視 線  $\mathcal{O}$ 先 に、 少 々 見慣 れ め 形  $\mathcal{O}$ 船 が 停 泊 し 7 41 た。

あ n が お ば あ さ ま 0 お つ し や る。 怪 物 か し ら

昨 日 は 見 か け な か つ たとは 41 え、 言 つ た 当 一人です 5 正 解 す る 自 信 0 な 41 答 え。

案 0 定、 老 婆 は わ ず か に 首 を ゆ す 0 な が ら 言う。

た

だ、

船

尾

に

髙

11

塔

が

設

置

さ

れ

7

41

る

 $\mathcal{O}$ 

が

珍しい

とい

う

だけ

0

船

おそらく

は

貨 物

船

か

何

か

だろう。

41 え え:... あ た L が 見 た。 怪 物 は、 もっともっ ٤ ず 5

つ

と大き

か

つ

たですよ

月<sub>ルナ</sub> 太 平 洋 領っ に浮か 域ブ ぶ、 ちっ ぼ。

け

な。

怪

物

候

補

を

見

限

り、

若

41

女

性

は

た

め

息をつく。

内

昭

和

日

本》。

そう、

です

か

西 暦 九  $\bigcirc$ 七 年、 昭 和 八 + 年 八 月 0 早 朝 茨 城 県 東 部

ケ 浦 0 北 浦 کے 鹿 島 灘 に 挟 ま れ た 南 北 に 細 長 41 地 域

霞

月

夏 0 盛 り غ は 41 え 早 朝 は 涼 L < 私 有 地  $\emptyset$ 砂 浜 に 他 0 人 影 は な 41

老 返は 存外 に し つ か り とし た 足 取 り で、 ふ た た  $\mathcal{U}$ 海 岸 を 歩 き 出 す。

か すぐに立ち 止まると、 若 41 女 性 に 向 か つ 7 訊 ね た。

「ところで、 あ な た どな た か L ら ? あ た し にず 41 ぶ  $\lambda$ 良 くしてく下さる  $\mathcal{O}$ に、 名 前 も 知 ら な 41 な W て 失礼

だわ。 よろし か つ た 教 え て 頂 戴

決 て失礼 な 物 言 41 で は な か つ た。

か L 若 11 女性 は 瞬 だけ 眉 をし か め、 握 つ た 拳 に力を込め るが すぐに息 を 吐 41 て 強 引 に 優 L 41 表情

> を 形

……私はおばあさまの孫で、彩河原美鶴ですわ」

婆は 美 鶴 0 言 葉にし ばらく 目を丸 くして沈黙するが、 ゆ が ておだやか な表情で言う。

「ミツル さ  $\lambda$ ね。 覚えて お きまし ょ う。 あ たし は 彩 河 原 菊き 華か と言うの だけれど……ごめ  $\lambda$ なさい ね あ

には孫はおろか子供もいないのよ」

「ですが……」

そう言いかけて、美鶴は後悔する。

次に菊華が言うことはいつも決まっているのだ。

「そうそう……そうい えば、 華かりゆう 兄様 0 奥 様 がミツルさんという名前だった気がするわ。 華 隆 兄さま、 ず 4 ぶ W

お会いしてないけどお元気かしら?」

「え、ええ……お元気ですわ」

美鶴はそこで、まともに菊華の相手をするのを打ち切った。

彩 河 原 家 0 前当 主 彩 河 原 華 隆 はすでに亡く、 現在は息子の か 衆 帥 い が 現 当 主を務めて お り、 美鶴 は 衆 帥

によって 月に 何 度 か 菊華 . の 様 子 を見に来ている……などということは 説 明 するだけ無駄なことだ。

な に し ろ美鶴 は、 菊 華に 会い に来るたびに自己紹介をさせら ń 孫だと名乗るたび勝手に彩 河原 華 隆 の 妻 に

字 面 は 違う が、 た し か に 美鶴 と同じ名前だっ たら し 41 にさせられ てい る。

華 は そ れ か ら、 美 鶴に は 理 解できな 41 昔語りを延々と 続けてい たが、 曖 味に 返 事 をす Ś ば か り で まっ たく聞

いていなかった。

他 0 親 戚 は 見放 L て も、 美 鶴 だけ は 諦 め て 11 な 11 <u>:</u> : 7 うスタンス を 維 持 す ること が 大 切 だ。

先 代 当 主 で あ る 華 隆 0 遺 言 に ょ り、 彩 河 原 族 が 昭 和 日 本 から後代 領 域 移 住するための条件… そ

そが、菊華の言う"怪物"をふたたび彼女に見せることだった。

0

指

示

そうし たら コ ノさ hが、 で は わ たく L が P り ま す غ お つ L ゆ 7 ね……」

お ば あ さ ま 41 え、 菊 華 さ ま。  $\frac{1}{\sqrt{L}}$ 5 話 も な ん です か ら お 屋 敷 に 戻 0 ま L ょ う。 本 日 は 菊 華 さ ま の 古 41 お 知

ŋ 合 41 0 方 が 2見えら れ るそうです b

そう 言 つ て 昔 語 り を 強 引 に 打 5 切 る と、 美 鶴 は 菊 華 0 手 を 取 り、 有 無 を 言 わ せ

つ な 41 だ 手 か ら、 菊 華 が 落 胆 L 7 41 る 気 配 を 感じ た が 2 れ 以 上 変 わ 0 眏 え 0 L な 11 話 に 付 き 合う気 は な 11

ず

歩

き

出

す。

来 訪 者 が あ ること は 昨 晚、 急 に 本 家 か ら 伝 えら れ た ば か り な 0 で 詳 し 41 ことは 何 も 聞 11 7 41 な 11 が 菊 華 0 知

人と 11 うこと は か な り 髙 齢 な 人 物  $\mathcal{O}$ は らずだ。

菊 菙 人 を 相 手 に す る 0 ŧ 面 倒 な 0 に、 さら に 複 数 0 老 人 を 相 手 に L な け れ ば な ら な 11 0 は 気 が 重 か つ た。

美 鶴 لح 菊 華 が 11 つ も 0 散 歩 コ ス を 4 つ ŧ ょ り も 早 足で 歩 き、 彩 河 原 家 0 别 邸  $\wedge$ 戻 る 道 を 歩 4 7 41 ると、 林 を

空 り 色 開 に 11 染 て め 造 ら ら れ れ た た 玉 道 昭 <u>Fi.</u> 和 日 号に 本 繋がる私道から、 でも少し 古い プの 台 の /[\ 車 柄 が な 走ってく 乗 用 車

タイ

切

車 は 人 ょ り ŧ わ ず かに早 Ċ 洋 館 0 玄関 前に停車 すると、 運 転 席 から 車 と同じく 小 柄 な女性 が 人 降 り 立

た。

そ 0 女 性 は 先 月で二十 兀 歳 を 迎 え た美 鶴 کے 同 年 -代ぐら 41 に 見 Ź る。

眼 鏡 を か け、 どこ か 昭 和 七 ダ ン な 雰 囲 気 0 漂 う 衣 装 に 身 を 包 h で 41

自 然 か つ 優 雅 な 所 作 で、 小 柄 な 女 性 は 人に 深 々と お 辞 儀 をす

コ 1 さ h

華 は そうつぶやくと 同 時 に、 美 鶴 に 握 ら れ た手を引き抜 き、 小 走 り に 駆

け

出

す。

お ば あ さ ま 危 な 11 <u>!</u>

あわてて後を追う、美鶴。

齢 を感じさ せ な 11 軽 やか な動きで小柄な女性 の前に立った菊華 ÷ は、 彼 女 の 両手を握 りしめた。

「キッカさん、おはようございます」

彼女は微笑みながら、菊華に挨拶をする。

追 41 つい た美鶴 が 横 か ら のぞき込むと、 菊 華 は 目 に 淚 を 溜 め、 感 激 に打ち 震えてい

た。

「こ……コノエさん、よね? 間違いないわよね?」

「左様でございます、キッカさん」

コ ノエと呼ば れ た 小 柄な女性は、 菊華にうなずい て見せてから、 美鶴に対しても改めて礼をする。

おはようござい ま す。 本 白 お 招 きにあ ず かり ま L た、 中 島近恵と申 し します」

そう挨拶された美鶴だが、 自 分が 漠然と予想し てい 、 た 年 配 の来訪者像とあまり に も 姿形 が 違うため、 適 切 な応

対をするのにしばしの間を要した。

「……よ、 ようこそい らっし やいい まし た。 私は 彩 河 原 菊 華 0) 孫で 美鶴と……っ !

そう、 自己紹介し かけてか ら、 瞬 遅 れで 彼 女が 何 者で あ る か 思い 7 たる。

大正 一昭和日 本 *〉* にて、 彩 河 原家と縁 戚 関 係に あ つ た 中 島 家 0 出 世 頭 中 島 知<sup>ち</sup>かみ の未亡人にして、 集積 報 で

構 築され た人類 世界たるドライブスペ ] スを 維 持 ·管理 す Ś 組 織 0) 職 員だとい う……。

もしかして、中島の……お、大奥さまっ」

美鶴の言葉に、近恵は小さな動作で肯定してから言う。

[\] まだ中 島姓 を 名 乗ら せてい ただい ており É す が、 今は昔のことにござい 、ます」

「そんな、とんでもない……」

中 島 近 恵 を名 乗るこの 女性が 本物 な らば、 彼女の 実 年 齢 は 菊華 とほ ぼ 同じ、 八十歳を 超 えてい るはずだ。

る

たび

に

自

己

紹

介

L

て

お

り

ま

す

わ

大

奥

さ

ま

の

ことは

覚えてらっ

L

ゃるようです

が

航 空 産 業に ょ り、 代で ひ کے か ど の 財 を 成 L た中 島 知 上。 そ 0 妻 で あ る 近 恵 には 人ならざる人、 模 造 人 間 で あ Ď,

不 · 老 示 死  $\mathcal{O}$ 存 在だと 11 う。

Z 0 ような 大物 が 来 訪するとい う 情 報 が な ぜ 美 鶴 0 耳 に 今 0 4 ま ま で 入ら な か つ た 0 だろう。

ホ ラ 朩 ラ、 Ξ ツ ル さ ん。 お 客 様 を立 たせ たま ま でどうする んで す か ? 早 < お 出 迎 え 0 準 備 をし 7 頂 戴

呆 然として 4 る 美 鶴 をよそに、 菊 華 が 言 う。

は は 7 準 備 は 家 政 婦 たち が B つ て 41 る はず です わ

「そう? な ら 早 < 上 が つ 7 41 ただい て。 あ たし は着替えて来 ます か ら、 コ ノ 3 h を応接間にご案 内 7 お 41 7

下さい ね

は 41 わ か り ま L た

達 | 者 な 足 取 り で 屋 敷 の 玄 関 に 向 か う

な L か 背 筋 が 伸 び 7 41 る ようにも見える。

心

菊 華 さ  $\lambda$ お 元 気 そうで 何 ょ り で す

菊 華 0 後ろ 姿を見 な が ら、 近 恵 が しみじ み を言 ゔ゙

お ば あ さま も、 大奥さまに お 会い で きて、 ょ ほど嬉 L か つ た 0 で し 、よう」

美

鶴

は

無

難

な

応

対

を

し

たつ

も

り

だ

っ

た

が

近

恵

は

わ

ず

か

に

表

情

を曇

ら

せ、

目

を

伏

せ

る。

あ の、 な に か 失 礼 なことでも?」

口 41 え、 ウ  $\Box$ そうで ク ? … … はござ え、 ええ。 41 ま せ ん。 お 年 0 せ ただ、 41 か 記 菊 憶 華 が さ 瞹  $\lambda$ 昧 が に 老ろうろく なら れ さ たようで、 れ たとう か 最 が 近 つ 7 は 私 お のことも り ま た わ も か 0 で 5 ず お 会 41 す

鶴 ざん。 差し 支え な け れ ば、 わ たくし のことは 近 恵と お 呼 び 下

「っ!……わかりました、近恵……さま」

お そるおそる、 言 わ れ た 通 り に 名 前 で呼 び だ が そ ħ で ŧ. さ ま, を うけ ず ĺ は 41 ら れ な 41 美 鶴 を見て、

近恵はわずかな困惑と共に小さく頷く

「ありがとうございます。どうか、お楽になさってください

「は、はい……恐縮です」

話 を 戻さ せ てい ただきます が 菊 華 さ W が 最 近 0 事 柄 を覚 えてらっ し や 5 な 4 0 は 事 実 の ようでござい ま

ね

: : ?

ざ も なけ れ ば、 菊華さんが わたくしに目通りされることもなかったでしょう」

それは、どういった……」

近恵は声を低くして、かろうじて聞き取れる声で続ける。

縁 され 美鶴さ ておりますもので。 んにはお知らせしてお 生前 に 41 た方が お 目 に よろ かかることは、二度とない しい かと存じます が ·····わ ものと心得ておりました……」 たくし、 二十年ほど前 に菊 華 ż  $\bar{\lambda}$ か ら 絶

中 大 土 島 恋 地 彩 愛 で 家 河 لح 0 働 原 親交が 末 < 家 に 小 は 中 作 江 あ 島 人 戸 つ 家 よ た。 り に 嫁 続 つ まり 菊 11 < だとい 華 旧 は、 は 家 知 で、 . う。 労使関 上 の 介明 従 当 治 妹 時、 係にあった。 日 に 本 当 彩 「たる。 河 でも 原 家 大地、 と中 近恵 の 主として知ら 島 家 夫である中 は 断 絶に れ . 島 近 て 知 41 ί 3 状 上 た。 態  $\mathcal{O}$ で 母 は、 対 あ す つ る たが、 彩 中 河 島 原 菊 家 家 華 0 は 0 末 彩 両 娘 1親だけ で 河 あ 原 家 は 0

両 家 が 大正 昭 和 日 本 移 住 し、 中 島 家 が 知 上 0 代に な つ た頃 ŧ 彩 河 原 家 は 大 地 主で あ り、 中 島 家 は

有 産 彩 な 数 業 河 断  $\mathcal{O}$ に 原 軍 手 家 れ 用 を 0 7 航 染 小 空 41  $\emptyset$ 作 機 る。 7 人 X か か ら ら  $\mathcal{O}$ 脱 力 却 有 に L 力 が ま た な 後 で とは 後 育て 々、 ろ 盾 11 上 え 両 も 家 げ な た。 に 41 禍 ま 名 根 初 ま も を 期 な 残 彼 45 0 すことと 頃 農 は は 航 家 に 彩 空 機 過 河 な 原 ぎ 械 つ 技 な 家 た。 に 術 か 援 つ  $\emptyset$ た。 基 助 を 礎 そ 求 研 め 究 れ たこと か が ら 変 は ŧ じ し あ  $\emptyset$ た つ 0 た 自 は よう 身 0 知 だ 会 上 が 社 が を 航 す 日 空 げ 本 機

<

ら

こ

こと

頃 た 河 に、 0 原 11 が 家 ٤ 何 ら か 子 援 11 供 助 中 ま 0 を B 島 産 L 家 知 め と な ら な 彩 か め 11 つ 者 河 た な 原 正 彩 き 家 妻で 大 河 0 原 財 力 あ 家 関 閥 る が、 で 係 近 あ は 恵 中 る 完 で 全に 島 中 あ 家 島 り、 か 逆 家。 ら 転 そ 知 L 0 7 上 政 41 11 が 略 た。 ま 起 に ささら 業 利 し 地 用 の 主とは た さ 当 ように れ 初 た 45 0 テス え、 が 菊 所 利  $\vdash$ 華 権 詮 用 だった。 を は  $\mathcal{O}$ 獲 地 機 得 体 方 製 0 す る 作 名 た 士 ŧ め ま に す に ま 目 ぎ な な を ら つ な 11 け 11 彩

私 0) こと、 御 存 知 な 0) で す か ?

美 鶴 は 鷩 き 0 声 を 上 げ た。

え え、 美 鶴 さ hلح は 二 + 年 ほ ど 前 に 文 正 昭 和 日 本 で お 会 41 L て お り ま す

め ら か な 所 作 で 緑 茶 を П に 運 び な が ら 近 恵 は そう告 げ る

彩 河 原 家 別 邸  $\mathcal{O}$ 居 間 な

ア ] ル ヌ 1 ヴ 才 様 式 で 統 さ れ た 洋 館 لح 内 部  $\mathcal{O}$ 調 度 類 は 車 門 知 識  $\mathcal{O}$ あ る 美鶴 0 目 か ら 見 7 ズレ

は 少 な 11

テ 1 ブ ル に は お 茶 と 軽 食 が 用 意 さ れ 7 41 る。

プ ラ 11 駅 を ス ケ ] ル ダ ゥ シし たよう な 高 11 丸 天 井 が 印 象 的 な 薄 暗 41 洋 間 で、 美 鶴 لح 近 恵 は 菊 華 が 身 支度 を済

ま せ 美 鶴 る が 0 近 を 恵 待 に つ 言 て う。 41 た。

「……二十年ほど前というと、私が四歳の頃ですわ」

「左様でございます。主人の葬儀にご参列下さいました」

たぶ ん両親に 連 れら れ てのことと思い ます が、 記 憶にござい ませ hわ。 申 訳ござい ま せ  $\lambda$ 

お 気になさらずに。 美鶴さんは、 テディ・ ベ ア 0 ぬいぐるみにご執心だったと記憶し 7 おります」

ええ…… は , , 祖 父からい ただきまし た。 子 供 *の* 頃 から古 物が好きだったもので、 今 は 原宿でアンティ ] クシ

ョップを経営しておりますわ」

「歩行者天国で有名な、東京の原宿でございますか?」

「はい、竹下通りに小さな店を構えております」

「アンチークと申しますと、古民具のようなものを扱っておられ

るの

です

ね

「えぇと、はい……いわゆる洋風の"古道具屋"、ですわ

左様でございますか」

近恵さまは今、何をなさっておいいでですの?」

ゎ たくしは、 二十 年ほど前に主人と死別したのち、 変数条約機構 **(**ヴ アリアブル ス条約 機 構) か ら の 出 向 と

う形で有 史世界領 域 連 合 の職員として、 〈大正昭 和 日 本 にて外交員を務めてお り まし た が、 昨 年 兀 月 ょ り 帘

和 日 本 に異動とな り まし た。 昨年度は 年 間 研 修 をい たしておりま Ū たが、 今年度よ り 正 式 に 職 員とし 7 勤

務いたしております」

そ れ か ら再婚・ ……とい 7 ます か、 別 な 方とおつき合 41 され たことは ?

「ございません。わたくしは、主人一筋でございますから」

それはそれは、ごちそうさまですわ.

わ ず か な時 間で あっ たが、 それでも美 鶴 は 噂 に 違 わ め 近 恵 0 人 柄 0) 良 さに 感 心する。

中 島 近 恵 は 彩 河 原 家 に つ 7 目 障 り な 存 在 で あ つ たは ず だ が、 に ŧ か か わ ら ず 彼 女 個 人 の 人 柄 を悪く言う者

を、 美 鶴 は つ 45 ぞ 知 ら な か つ た

た だ 人 を の ぞい て

そ れ か ら、 ば L 0) 談 笑 0 0 5 美 鶴 は 近 恵 に 懸 案 を 切 り 出

近 恵 さま:: そ れ で、 さ き ほどお 伺 41 L た 件 で す が

は 11

微

妙

な

話

題

だだ

つ

た

美

鶴

と

L

て

は

初

 $\emptyset$ 

7

聞

<

内

容

た

 $\mathcal{O}$ 

で、

どうし

て

ŧ

確

認

7

お

<

必

要

が

あ

つ

近 恵 は わ ず か に 表情 を 引 き 締  $\emptyset$ た も 0) の、 平 ・然と美 鶴 応応 対する

が、 だっ

菊 華 ż ま:: お ば あさま は 通 例ですと、 入浴と朝 食を済ませるはずですので、 も うしばらくお待ちい ただくか

思 45 ます

構 でござい ま す。 突然 来 訪 41 たし まし たの は、 わたくし 0) 方でござい ます か ら

まと菊 あ り 華 が とうござ さ ま 0 間 ι √ に 何 ま す。 が あっ で し た たら不 0 か 躾 お 教 で え はござい 7 ただけ ま ませ す が  $\lambda$ でし ょ ろし よう け か れ ば ? 詮索するつ 11 え、 差 も L 支 り え は な あ け り ま れ ば せ hが 近 恵 私 さ

も 今 は お ば あ さ ま 0 面 倒 を見 る立 場 に あ り ま す の で、 知 つ て おく ベ きでは な 11 か と愚考 す る 次第で す わ

近 恵 は L ば ら < 思 案 顔 で 丸 天 井 を見 上げ る。

77 ょ として、 気 を悪くし たの では と美 鶴は 心 配 L たが、 そうで は な か つ

た

美 鶴 さ  $\lambda$ は わ たく U と菊華 さ  $\lambda$ そ n に、 わ た < の亡き主 人 لح 0 関 係 を 御 存 知 で す か ?

え、 詳 し 7 こと は 何 こもうか がっ て おり ませ  $\lambda$ 

左 様でござい ます か で は、 そ の 辺 り か らご 説明さ せて 41 ただきます」

な 菊 妻 は ったとい 華 大 が 彼 二 十 īF. 女を 昭 う 歳 和 彩 我 を過ぎ H が 河原 本 子のよう にて、 た頃 家 。 の " に可 そ 彩 失 策" 0 河 愛 頃 原 Ĵ が が 菊 り、 明 で 華 に、 ら は、 幼 か 11 彩 に 幼 菊 な 河 4 華 り 原 頃 も つつ 家と中 か 良くなつい ら あ 頻繁 -島 5 た。 家 に 中 の てい 島 力 家に 関 た。 係 は 出 菊華と中 逆 入り 転 L L て 7 島夫妻との お 41 n, る。 結 未 婚 来 関 の 係 大 た が ば 財 変 閥 か 化 を り 援 0 た 助 中 L 島 は 損 夫

た。 華 近 恵 隆 に 時 は す は でに 中 生 島 殖 能 家 に 力 中 が 島 ふ なく、 た 夫 妻は た び 数 彩 知 上 河 人 0 原 に は自 養  $\mathcal{O}$ 子 身 を <u>"</u> 迎 の 子 えて を を設 送 り 11 け 込むことを画 た る が 意思 知 が 上 な 0 策 実 41 する。 子は ようだっ 内 そ 縁 た。 も含 の 矢 当 め 面 7 に 時 立 存 の た 彩 在 さ 河 し 原 れ な 家当 , , た 0 主 が 模 で 造 あ 菊 人 間 る 華 彩 で で あ あ 河 つ 原 る

ること 大 恵 上 あ る る。 人 が の を異 知 の 自 は 上 一分と年 が 姿 性 圕 とし 菊華 でき で、 彩 井 か 河 たの 7 ら 言葉 齢 原 は 愛す 的 家 0 従 だ。 を話すこともできたし 入 に 兄 0 は 思 るように れ 妹 それ 大差 惑 知 同 と菊 恵 士 が کے も が な な は あ 可 華 り、 能 41 つ 個 41 ことも え、 て で 人 菊 あ 0 11 華 る 年 た 意 はそう 知 な の 志 0 つてい 般的 だ。 ら が 差 合致してい ば は三十 その 確 な社会常識 信 た。 多 歳 するよう 小 頃 模造 以 歳 上。 たこと。 菊華 が 離 も 人 に 身 間 は 政 れ なっ に で す 略 7 でに 兄 41 つ あ 的 てい けて る ようと、  $\mathcal{O}$ な 近 知 ょ 婚 た。 上と近 恵 う 4 姻 る。 に は 関 慕 同じ 係 だ 生 恵 つ の ま 人間 か 7 強 0) 要だ ら、 れ な 41 た 同 るうち、 れ 士 知 瞬 そ つ 一で 間 た 上 め たが、 と 結 か を ば 知 ら 聞 11 老 り 少 れ 41 つ る 合 7 7 L 々 ること 1, 0 事 41 か が 菊 情 た 華 自 結 が な 異 ば は で れ き 近 知 な

る。 に 乗ら 当 近 初 恵 な を か 彩 つ 河 時 た。 原 的 家 に中 業を 側 は 島 煮や 近 家 恵 か Ü を ら た彩 中 遠ざ 島 河 家 け 原 か たの 家 ら 側 放 ち、 は 逐 方針 し、 知 上と菊華を二人きりにさせ、 を 菊 転 華 換 を 正 妻 に 正 据 妻でなくとも え ようと 画 知 上 策 既 し 成 に た 事 菊 が、 実 華 を 0) 知 作 子 上 らせようとい を設 は 頑 け لح させようとす て そ うのだ。 思

ござ

41

ま

し

ょ

う

だ 島 あ を 菊 離 る 家 が 菙 نے れ は か た。 昭 そ の 彩 和 0 関 河 知 日 中 頃 係 原 上 本 島 に を 家 強 نے は 家 は そ に か  $\emptyset$ 取 知 るこ れ 移 引 ら 上 す 住 権 0 き ら کے 築 す 0 益 ることとな を得 ŧ き が あ 拒 上 で つ 絶 ることを げ き た す た た 地 る。  $\mathcal{O}$ 企 元 つ 業 企 は 菊 断 た は 後 業 華 年、 0 念 史 は 男 実 L つい لح 菊 性 た 異 彩 華 を に、 婿 な  $\mathcal{O}$ 河 原 末子 る 養子とし 知 家 経 上 で 緯 は か あ で 5. 養 る て 解 迎え、 子 歩<sup>ぁ</sup>が学く 体 女 に さ を中 出 れ とし 数 L た 直 島 人 て見られることは 歩 後 家  $\mathcal{O}$ 学 子 に  $\mathcal{O}$ を設 知 養子としたこと を 呼 上  $\mathcal{N}$ 自 け る。 身 戻 し、 も 没 結 な 局 か の 族 つ で 近 み 彩 た。 に 後 恵 河 代 留 そ も 原 中 領 ま 家 0 域 島 が 後 中

が が た。 を な ま ぜ、 勤 知 彩 じ そ 務 上 河 に え 地 年 れ 原 受 た と 齢 ま 家 で、 な 恨 け 的 が つ み 入 に 大 た <u>о</u> は 表 れ 今 言 ら 同 面 正 葉 じ も 的 昭 れ を残 は に 和 近 ず は 日 同 本 の 中 恵 し、 じ は 近 人 島 間 恵 を 菊 夫 近 離 華 妻、 恵 で が と と絶 あ 年 れ 会うべ る 長 る 特 者 は に 直 縁 とし ず 前、 近 L きで の た菊 恵 て 菊 と 近 良 振 は 華 恵 菙 る な が 好 が は 41 ま な な 菊 文 と ぜ、 華 41 関 考 に 係 正 えて 拒 知 を 别 昭 保 上 絶 れ 和 41 さ と つ  $\mathcal{O}$ 日 幸 た:: て れ 挨 本 福 拶 な 41 をし た菊 け な を去 つ 家 れ 41 ば に 庭 華 つ を が 41 来 た。 最 け 築 た 時、 < 思 近 な 以 ま 0 41 11 来 で 0 そ か 0 は 丈 ? 0) か 決 を + ک ぶ 定 年 5 に 的 差 あ ま な 5 昭 け 别 断 ざ 和 的 た 絶 る 日 な 0 は だ 本 言 近 訪 11

そんなことが、おばあさまに……」

制 度 わ そし たく 7 認 は め 天 ら 地 神 れ た 明 行 に 為 か でござ け て、 41 主 ま 人と す。 0 で 関 す 係 が に そ な れ W で ら 恥じ も、 る 菊 所 華 はござ さ hに と 47 つ ま て せ わ h, た < 人 L 間 は 模 許 造 L 難 人 間 11 存 0 在 婚 つ 姻 た

確 そう か に 41 な るここ え ば 確 数 か 年 に 0 ことだっ 美 鶴 が 菊 た。 華 か ら。 コ 3  $^{h}$ な る 人 物 0 昔 語 り を 聞 < よう に な つ た 0 は 記 憶 ゆ 言 動 が 不

そ れ ま で 菊 華 に とっ て、 近 恵 は 触 れ たく な 41 過 去 0 傷 だ つ たの だろう。

近 恵 さ ま……で は な ぜ、 今に なって絶 縁 さ れ た菊 華 さまとお 会 41 に な る の で す か。 私 か ら 言 う の も 憚 ら れ ま す

が……まるっきり、おばあさまの……」

逆 愝 ムみでは な いいです か そう言おうとした 直 前 天井 か ら 光 が 漏 れ てきた。

二人が見上げると、 低い 擦 過音とともに居間 . の 高 45 丸天井 が二つに 割 れ 隙間 か . ら自 41 光が 漏 れ 青空と

雲があらわになって行く。

「コノさん、お待たせしてごめんなさい」

そう言って、奥の扉から室内着に着替えた菊華が出てきた。

「菊華さま、あの天井の仕掛けは、一体……?」

もちろん、 お 兄 様 が あ た しの ために造ってくだっさった天窓ですわ

ガ (ラス 面 は 多少汚 れて 7 るも の Ó, 先ほどまで薄暗 か つ た洋間 に、 明 る 41 光が差し込んで ι √ た。

「見事な仕掛けでございますね」

菊

華

の

言葉通

り、

割

れ

た天井の下にはガラスがはめ

込まれた円蓋があり、

天窓としての機能を取り

戻して

7

る。

私も、はじめて知りましたわ……凄い」

暗 7 ま まで は 気 分 が 滅 入ってし まい ます も の。 さぁさ、 二人とも。 楽 L 41 時 間 の は じ まりですよ」

気に明るくなった居間で、三人は雑談をはじめる。

主に、菊華が話し、近恵と美鶴が聞き役に回った。

内 容 には、 とり とめ  $\mathcal{O}$ な 7 昔 話 で、 近 恵 が し たような重 4 話 題 は 切 な 41

時 折、 美鶴 に は 理 解 で きな 41 話 題 が 出 た 時 は、 す か さず 近 恵 が 捕 捉 し っ く れ た

話 題 0 大半 は 中 島 夫 妻と菊 華 が 良 好 な 関 係 を保つ ζ , た頃 のこと。

中 島 知 上 が 仕 事 で 不 在 の 時 は 近 恵 が 菊 華 0 相 手をしてくれ たとか、 夫 妻 に 連 れ ら れ 7 複 葉 機 0 テ ス 1 飛 行 を

見 学 L た か 近 恵 は 車 0 運 転 ŧ 上 手 41 が、 飛 行 機 0 操 縦 も できると

話 題 は 多 岐 に わ た つ た が 11 つ も 0) 錯 綜 L た 独 り 言 で は な < 論 旨 も は つ きりとし て る。

こ れ ほ ど楽し そう な菊華 を、 美 鶴 は今まで見たこと が な

美 鶴 が 子 供 0 頃 記 憶 が は つ きり し て 41 た時  $\mathcal{O}$ 菊 華 は、 気 むず か し < 近 寄 り が た 45 人 物 で あ つ た 近 頃 は 意

41

思 0 疎 通 が 困 難 で、 会 話 をす る 0 が 苦痛 で L か な か つ た。

だ が 今 は、 童 女 の ように嬉 し こそうに: 昔 語 り を す る菊華 ・を見 て 11 るだけ で、 美 鶴 ŧ 楽 し 41 気 分に な ってくる。

あ る 41 はこ れ も、 中 島 近 恵  $\mathcal{O}$ 人柄に よる も の な 0 だろうか。

幸 福 な 時 間 0) 後 に 訪 れ た、 屈 辱 的 な 破 局 と 絶 縁

年 を 経 T 人 生 0 晚 節 を迎 え、 記 憶 が 曖 昧 に な つ た 菊 華 は、 楽 L 41 記 憶だけ を思 4 出 L て生きて行くことが

ŧ

お

ま

す

お

話

を

L

41

0

で

す

4

る。

か するとそれこそが、 も つとも幸 福 な 時 間 と呼 ベ る 0) か ŧ L れ な

話 手 題 数 が ではござい 巡したところで、 が 近 恵 電 が そう申 拝 借 L 出 た た。 が

家 政 婦 に 案 内 さ れ 近 恵 が 中 座 す る。

美 鶴 は み Ü み と言う。

久

々

に

沈

黙が

訪

れ

た居

間

で、

菊

華

が

にこにこし

なが

. らお茶請

け

Ó

モ

ナ

力

を

 $\Box$ 

に

運

W

で

4

た。

菊 華さ まは、 本 当に知上さまと近 恵さ まのことを、 大切 に 思っ てら つ L

え え、 ええ、 も 5 ろんですとも。 ふ た 親 は あ ま り 構 ってくださらな か つ た か ら か わ り に 随 分とお二人に甘え

や

るので

す

わ

ね

たも のですよ

親 代 わ り、 لح 41 つ た所です か

……親であり、兄姉であり、友人であり……それに……」

愛すべき人であり、憎むべき人、とでも言いたいのだろうか

今の菊華が、近恵をどう捉えているのか、美鶴には計りかねている。

ずいぶんと意識がはっきりしているように見えるが…

お待たせいたしました」

そう言いながら、近恵が戻ってきた。

席 に戻 る前 に 彼 女は 懐中時 計 を取り出 して 時 刻 を確 認 はする。

「コノさん、

別なお約束でもあるの

か

しら?

でしたら、

あまり

お

引き留めし

ても悪

11

わ

ね…」

いえ、そうではござい ませ ん。 丰 ッカさんは 最近、" 怪 物, が 見たいとおっ しゃってい るそうでござい ま す ね

ハッと息を呑む美鶴。

菊華はにこにこした表情のまま答える。

「ええ、 そうなんですよ。 若い 頃に一度だけ見たのですけど、 ぜひもう一度見てみたい

「その"怪物"は、どなたとご覧になったのですか?」

近恵の問いに、菊華は不思議そうに言う。

あら……"怪物"とは何かではなく、誰と見たかを知りたいの?」

左様でございます。ご教示くださいますでしょうか」

華 は 笑顔のままだったが、 その笑顔 が一 瞬だけ凍りつい たように見えたの は、 美鶴 の 気 の せい だろうか。

「ええ…… 構い ま せ  $\lambda$ ょ。 たしか、 知上さんがこの屋敷に来て、 あたしを連れて" 怪 物, を見物しに連れて行 つ

てくださったのですわ」

「左様で……ございますか」

ものです」

そ れ か ら 菊 が 続 け た 言 葉 は、 美 鶴 にとって予 想 外 0 も 0 だっ た。

コ J さ  $\lambda$ な ら、 あ た L 0) 言 う。 怪 物 と は 何 か、 心 当 た り が お あ り じ B な 11 か L

「はい……たしかに心当たりがございます

近恵さま、おわかりですの?\_

そう驚く美鵠の目を、丘恵はららりに見

そう驚く美鶴の目を、近恵はちらりと見た。

責 め る よう な 視 線 で は な か つ た が、 何 か 言 45 た げ で は あ

美 鶴 は 泊 だけ 鼓 動 が 高 ま る 0 を感じ た が 素 知 ら め 振 り をし

かでござ わ たく 4 し ま が す。 分 か り 本 当 か に、 ね る 0 怪 は、 物 菊 をご覧に 華さ h が なり ど 0) た よう 41 0 な か、 意 図 ご 覧 に 怪 な 物 れ な をご覧 ζ, ことを前 に な り 提 た に、 7 لح کے 無 お 理 難 つ 題 を B お つ つ 7 41 る

つ て 4 る 0 か わ か り か ね 7 お り ま す

菊華はいたずらっぽく笑う。

「……どちらでも よろしくてよ。 華 隆 兄 さ ま 0) 遺 言 は わ たく L が 存 命 中 0 み 有 劾 で す も の。 お 兄 様 も、 あ た

後 代 0 Н 罪 本 滅 ぼ  $\mathcal{O}$ し 移 0 つ 住 を ŧ 望 り む か な 知 ら、 り ま あ せ た hL が、 に。 他 怪  $\mathcal{O}$ 物 方 Þ のご を 見 せる 迷惑も考 ょ り、 えて欲 も つ と簡 41 単 も な 0 方 で 法 す。 が あ そもそも、 り ま す も 0 本 気で ね 彩 河 原 が

そう言 11 な が ら、 今 度 は 菊 華 が 美 鶴  $\mathcal{O}$ 目 をちらりと見る

やはり、何か言いたげであった。

41 L れ め 恐 怖 が 美 鶴 0 背 筋 を 這 41 上 が

菊 菙 は  $\nabla$ ょ つ とす ると" 正 気 な 0 で は な 11 か そう考えて か ら、 な ら ば 彼 女 が 近 恵 を 親 41 人 物 て迎

る。

え入れるはずはないことを思い出す。

そう、

何

も

怖

れ

る

必

要

つは

な

11

近 恵 が ふたたび、 懐 中 時 計 を 取 ŋ 出 して 時 刻 を 確 認

どこか で、 低く 唸 るような 音 が 聞こえる。

大型 0 空 調 機 か 冷 蔵 庫 が 発す るような音だ。

ず 41 ぶ ん 前 か ら 聞 こえて 41 た気もするが 41 つ の 間 に か その 音 が か な ŋ 大きなもの に なってい

ま 3 か

そうつぶやい た美鶴 の 声 は、 爆 音 に かき消 され る。

声 を張 り Ĺ げ、 近 恵 が 告げ た

丰 ッツ 力 さ h の お つ しゃ る。 怪 物" を招 致い

たしました……ご覧下さ 7

天 窓 越 L に見えるそれ は、 巨 大な 飛 行船だっ た。

彼

女

0

言葉と同

時

に、

陽

光

を反射して鈍

く輝く銀

色の"

怪 物"

が

悠然と視界に

の

L

か

か

ってくる。

グラー フ ツ エ ツ **^**° IJ ン … そ  $\lambda$ なこと、 あ りえ な 41 つ !

美鶴 は 叫 んで 庭 に 飛び 出す。

メ ŀ ル を超える巨大な 船 体と、 下 部 に 取 り 付 け 5 れたゴンドラ、 十 字 0 尾

煙 を曳きながら爆 音を上げるエンジン。

眏 像 で も なく、 模型で もなく、 本物の大型 硬 눛 飛 行 船 が 鹿 島 灘 0) 海 岸 線 沿 11 に 悠 然と 飛 行 L 7 7 た。

'n エ ツ ペ IJ シの 怪 物…… また見ら ħ る な  $\lambda$ て……」

美 鶴 0 後 から 庭に 出 た菊 華 が 感 嘆 0 声 を上 上げる。

L か し、 同 じ < 庭 に 出 ラ 空を見上 げ る 近 恵は 言 つ た。

41 41 え。 あ れ は 丰 ツ 力 3  $\lambda$ が 大正 昭 和 日 本 でご覧になっ た純 硬 式 の 航 空船 ツ エ ツ ペ IJ ン伯號ではござい

ま せ  $\bar{k}$  恵

は

知

上

が

没

し、

菊

華

か

ら

さ

る

ま

で

ら

め

り

を

通

L

た

コ さ h 違 う、 船 な 0 で す か ?

逸 で 船 L 体 Z に 星 二六とし  $\mathcal{O}$ マ ク て が 建 あ 造さ る か کے れ た 存じ 0 5 ま す。 米 玉 独り に 委 逸ッ 譲  $\mathcal{O}$ さ L れ Z Z 七 R グ 3 ラ と な つ フ たア ツ X エ IJ ツ 力 ペ 海 IJ 軍 ン 号で 所 属 は U な < S S お 口 な サ < ゼ 独

ル

ス号

にござ

4

ま

す。

諸

元

は

若

干

異

な

り

ま

す

が

ツ

エ

ツ

ペ

IJ

ン

泊

號

 $\mathcal{O}$ 

姉

妹

船

に

当

た

り

ま

す

菊 華 は ま ぶ しそうに 銀 色  $\mathcal{O}$ 巨 船 を見 上 げ な が ら、 ゆ つ < り と首 を 振 る。

41 41 Ź どちら で ŧ 構 41 ま せ *\hat{\omega}* ∙ 知 上 さ  $\lambda$ لح あ た だ け の " 怪 物 を、 も う 度 見 ら れ た 0 で す ŧ ŧ

視 界 を 涙 で 歪 め な が ら、 菊 華 は 声 を 上げ ず ĸ 泣 11 た。

う、

思

41

残すこと

は

あ

り

ま

せ

h

あ

り

が

とう。

本

当

に

あ

り

が

とう、

近

恵

さ

ん……」

11

な

が

ら

沂 恵 は 彼 女 0 両 肩 を 抱 11 て 支え、 二人 は 空を 見 上げ Ć 11 た おそら < は 人 0 男 性 を 想

11 飛 た 周 船 ラ 従 つ V 辺 見 彩 妹 物 ŧ 降 フ 河  $\mathcal{O}$ り 宿 に 原 通 り る か ツ 家 泊 で つ し 施 Z エ が あ つ ŧ ば 設 ッツ け つ は り  $\sim$ 中 L ど た で 職 7 IJ 島 Z 知 し 知 務 ン 家 上と菊 کے 上 を ŧ 号 忘れ 満 0) 菊 が に 絶 華 迫 杯 結 霞 華  $\mathcal{N}$ 縁 つ 7 も で ケ 変わ た。 を 浦 飛 つ きを れ 共 行 别 を そ に 訪 ら 船 邸 ず 彩 深 0 見 は れ 中 想 物 飛 河 た め 知 ようとし 島 65 に 行 原 折 興 家 が 船 家 に じ 決 に 遂 見  $\mathcal{O}$ げ 物 遊 る 行 振 别 た  $\mathcal{J}_{i}$ ら に 7 邸 さ に れ 41 は ħ 政 で 過ごさ 来て うっ た。 略 ること ど の て 気 社 そ 11 た。 は 持 つ せ れ 用 5 け た と は で 0) 0) 称 知 つ だ。 あ 41 立 世 上 . 界 つ て か に 地 事 た で 近 ら な \_\_-んが、 お 実、 周 か あ 恵 お つ つ を 0 た。 台 菊 ツ 途 ょ た そ に が。 華 湾 エ に 知 ツ に あ 0 とっ 事  $^{\circ}$ 呼 近 上 つ IJ  $\mathcal{J}$ 情 に た 恵 て とっ ン 寄 ド は が 泊 聞 戻 は せ 1 7 號 ツ 清 17 つ 7 た は 来 そ 0 水 時 41  $\emptyset$ 飛  $\mathbf{H}$  $\mathcal{O}$ 歳 舞 間 た 0 行 台 が 知 際 船 0 離 上 か は 飛 ガ 近 は ら れ 行

丰 ツ 力 さ  $\lambda$ も し、 よろ L け れ ば あ 0 船 に 乗 つ 7 み ま せ ん

か

?

そう、 近 恵 が 言 しった の は、 口 サンゼル ス号が 太平 洋 上に 出 て、 か な り 小 さく見えるように なってからだった。

菊華は涙を袖でぬぐい、背後で自分を支える近恵を見る。

「乗れるの……ですか?」

17 て 左 お 様でござい り ŧ す。 ます。  $\Box$ サンゼル 主人から、 ス号はこれ キッカさんが今度はツェッ より 補 給を受け た後、 ペ 帘 リン伯 和 日 本 號 に乗ってみたいとおっしゃってい か ら 有 連 君府 有 連イスタンブ たと聞

を 経 由 L て後代領域  $\wedge$ 遷 移い たします。 乗船 0) 手配 は 済んでおり ŧ す が お 乗りになり ますか?」

近 恵 0 申 L 出 に、 菊 華 は 少 女の ように瞳 を 輝 か せ る。

「乗りたい……乗ってみたいです、コノさん」

承知いたしま……」

"ちょ、ちょっとお待ちになってくださいっ!」

そこでたまらず、美鶴が叫ぶ。

「近恵さま…… 断 り もなく、 何を勝手に決めているんですか ? お ばあさまの 面 倒 は、 私 に任されておりますわ

菊華さまも、もっと冷静に考えてからお決め下さいっ!」

その態度が、さらに美鶴を苛つかせた。

「だい た 41 あ 0 船 に 乗るって、 どうやって? 今 0 日 本 に 大型 0 硬 式 飛 行 船 を 係 留 す る施 設 な んてござい ませ

んわ。 霞 ケ 浦 0 自 衛 隊 基 地にだって、 記 念碑以外、 何 も あ り ま せ W も の。 地 上 0 支援 要員 も な L に、 体どうす

るおつもりかしら?」

近恵は菊華をかばうようにして一歩前に出ると、静かに言う。

美 鶴さん は、 怪 物 の 正体をご存じなかった割 に、 ず 4 ぶ んと 飛 行 船 0 事 情 に お 詳し 7 ようでござい ま す ね

そ h なこと は 関 係ござ 41 ま せ W わ。 お ば あ ż ま を、 あ ん な 水 素  $\mathcal{O}$ 塊 に 乗 せ る な W て 危 険 な は

行 ア 船 メ  $\mathcal{O}$ IJ 爆 発 力 事 海 故 軍 に が 保 関 し 有 ま す る し 釆 7 行 は 船 水 は 素 す を ベ 使 て、 用することよりも  $\wedge$ IJ ウ ム式でござ 外 皮 4 に ま す。 問 題 引 が あ 火 す るとい る 危 う 険 0 は が ざ 通 41 説 でござい ま せ ん。 ま ま た 飛 そ

0 扙 策 は す で に な さ れ 7 お り ま す。 係 留 と 補 給 乗 船 に 関 し ま し 7 は 覧下 さ 11

美 鶴 が 近 恵 0 示 す 方を見ると、  $\Box$ サ ンゼ ル ス 号 が 洋 上 に 停 泊 し た 船 と繋 が る 瞬

そ れ は 今 朝  $\emptyset$ 散 歩 で 見 か け た見 慣 れ め 形 0) 船

口 サン ゼ ル ス 号 0) 半 分に も 満 た な 41 洋 上 0 船 が 空 中 0) 船 をつ

なぎ

止

め

7

11

る。

間

だっ

船 尾 0 塔 は 飛 行 船 0 係 留 マ スト だっ た 0) だ。

号 ア を X IJ 建 造 力 41 海 た 軍 し は ま L 独 逸よ た。 そ り 学 れ を W だ 後 ... 代 領 行 域 船 技術を にて 運 独 用 で 自 きるよ に 発 展 う、 さ せ、 改 修 洋 上 た で 0 も 補 0) にござ 給 を 可 4 能 ま に す。 す る 釆 迎 え 行 船  $\mathcal{O}$ 舟 母 艦、 艇 が / $\vdash$ 

ら に 向 か つ 7 41 る はずでござい ま す。 丰 ツ 力 さ W 身  $\mathcal{O}$ 回 り 0 ŧ 0 だ け で 結 構です か ら、 お 支度 を なさってくだ

さい。

力

はい、コノさんのおっしゃる通りに」

で す か ら 勝 手 なこ とは な さら な 45 で、 下 さ 41 と

そう 反 論 す る 美 鶴 だが そ 0 声 は 弱 々 L 11 も 0 に な つ て 41 る。

屋 敷 に 戻 つ て 41 < 菊華 を見 送 つ て か ら、 近 恵 は 美 鶴 を 見 据 え 静 か に 言 う。

本 件 に つ きま し 7 は 彩 河 原 衆 帥 さ h お よび 彩 河 原 家  $\mathcal{O}$ 親 族 会 議 にて了 承を得て お り ま す。 わ たくし は 本  $\exists$ 

衆帥さんの依頼で参りました

「そん……な、私だって衆帥さまの指示で….

菊 華 さ  $\lambda$ が お つ L や る。 怪 物 " を、 こうして実際 に お 見 せ す ることは た か に 般  $\mathcal{O}$ 方 に は 困 難 でござい

ま

で そしてここ、 L あることは よう。 です が... 明 霞ケ 合でござい 浦 怪 0 物 " 歴 史 が ます。 を 何 調 で ベ あ そ れ る 。 。 ば、 か が 怪 わ 怪 物 か 物 ら を、 な 0 11 正 美鶴さん 一体が、 ということは 戦 は 前 に 見 せ 飛来したツェ な 4 ようが かと存じま な " [} 伯號と呼 す。 で は 菊 なく、" ば 華 れ ż た大  $\lambda$ 正 の 型 体 言 が 硬 動 わ 式 と 釆 経 か ら 行 な 船

「?……衆帥……さまが……」

" }

と言

41

続けたことを、

衆帥さ

んは

訝しんでおられました\_

って れば それ お ٤, り ま 族 す 全 昨晚 体 行 0 わ 後 代 れ 領 た彩河 域  $\wedge$ .]原 0 家 移 の 住 を認 親 族 め 会議にて、 な 7 とい う 華隆さん も 0 です 0 が 遺 言 これ 一つまり、" を達成 困 怪 物, 難 に つき無効とする を菊華さん に 見 کے せ 決 な ま け

... ...

今後は 個 々 人 の 判 断 で、 移住 を決めて良いという方針に転換されまし たし

「では、遺言そのものが……」

達成の是非にかかわらず、無効となっております」

「……私 な に、 やって た の かし ら。 そんなことも知らずに……知らされずに……」

美鶴 の 不 審 な 行 動 は 衆 帥 0 知ることとなり、 親族会議にも呼 ば れ ず、 一族でも な 47 近 恵によって暴 かか れ たとい

うことか。

まるで、 タネを見 透 んかされ<sup>・</sup> た手品 を必 死で Þ Ŋ 続 け ć 41 たよう なも のだ。

さぞや滑稽に見えたことだろう。

近恵は続ける。

41 ま 華 す 隆 が、 さ h彩 0 遺 河 言に 原 家 。 の は、" 多くの 怪 物 方 々 の は 正 御 体について気づいて 存 知のようですよ。 大半 も他 言してはなら . の 方は、" わ か な つ 11 て とい 4 う条 る。 項 か ら も 断 あっ 念され たようでござ てい 、るの

に 美 鶴 さ んだけ は わ か つ 7 11 な 7 ふ り をし て、 菊 華 さ h か ら 離 れ ようとし な か つ た.... よろ L け れ ば

その 理 由 を お 教 えい ただきたい  $\mathcal{O}$ で す が

そ れ を 知 る ため だけに、 自 分 は 泳 かがされ 7 4 た とい う の か

Ŋ つ・・・・・・うつ・・・・・」

美 鶴 は 41 つ 0 間 に か、 自 分 が ひどく追 41 つ め ら れ 7 41 る ことに 気づい

近 恵 は す ベ て を 計 算 づくでこの 館 に ゆ つ 7 来 た  $\mathcal{O}$ だ。

何 も 恥 じ ることな < 堂 一々と。

絶

縁

し

たはず

の

菊

華と

関

保を修

復

あ

る

はず

0)

な

...

怪

物

ま

で

呼

び

寄

つせて。

対 て自分はどうだ。

自 分 は 怪 物 の 正 体 も わ か ら ぬ 無 能 を 演 じ 続 け な ら が ŧ L も 他 人 が 遺 言 を履 行 ようとしたら妨 害す

な 11 ま ん さら と浅ましく、 な が 5 美 ちっぽ 鶴 は はけで、 自 分 が 愚 慘 め か に な 行 な つ 為だろう……。 た。

うずく 、まり、 膝 を 抱え る。

この 女さえ 来 な け れ ば 私 は、 私 0 望 む ま ま に 生 一きら れ たと 7 う の に コ 1 ツさえ 4 な け れ ば

の 、 出 来 損 な 45  $\emptyset$ 

ゔ゙ ん、 鶴 0 うん、 心 に、 澱 わ か W り だ ...感 ま す…… 情 が 吹 き わ 出 か り し ます はじ よ、 め た ミツル 時、 ふ っ さ ん と誰 の か 気 0 、持ち……」 手 が 彼 女 0 頭 0 上 に 置 か れ

た。

見 上 げ るとそこに 優 41 眼 差 し を 向 け る 菊 華 が

4

た。

お ば あ さま……」

菊 華 は おだ B · か調 子で、 お だ B か で は な 11 言 葉 を吐

作 わ ね ょ り あ で 笑 たし ね 顔 ŧ そ で、 に れ ŧ 経 は あ たし 験 が コ ノ 0 あ 大 り さ ま 切 W 0) な す よ。 せ ŧ 4 0 で を 老 根こそぎ奪 は 7 な ることも 4 し、 41 知 コ ノさ ら 取って、 め hを恨 出 来 損 むことで 体 何 な 様 41 の " 0 ŧ つ な ŧ 生 一き人 41 り な 形 0) そ ? れ 0 は 分 人 で 際 で、 Ξ も ツ な ル わ 4 < さ か hせ つ に に た も ふ り わ L か つ 7 る た

美鶴 は 菊 菙 41 は は 美 し 鶴 わ は 1, が が 泣 れ た手に とて き P む も よく、 )まで、 けずが り ずっと彼 つ わ き、 か り 声 ま す 女 を 0 出 わ 頭 て 泣 をなでてく れ

た。

こと に 可 し た 万 ンティ が 7 わ 頼 能 な を 5 だ け も、 ぜ" が、 だ に 思 た ŧ. そ クシ 41 つ が 怪 知 も 有 0 物 らさ 力 先 怪 り  $\Xi$ な で は 物 ツ 0 れ 出 事 プ な 正 る。 が 資 業 か は 体 が 者 つ 菊 現 に 美鶴 つ 華 た 0) 上 在 が、 \_\_ 手 0 ι √ の く行く は て。 ところ 前 人 アン そ が、 に 知 現 れ テ 保 経 で れ 美 ら 1 鶴 証 営 も な な は 7 自 が は 11 よう クシ 彩 きわ 分 な ふ , り 0 河 7 監 事  $\Xi$ 原 め 視 ツ 業 7 を 0) ま た、 L プ し 0 順 人 を経 て 成 間 調 7 来たの、 彩 功 で で 11 営 あ が な 河  $\mathcal{O}$ す < る。 彩 原 か、 だ。 るか 河 な 0 原と 名 L 美 れ 鶴 そ たわ ば を か の 7 捨 援 は ら、 う 助 7 万 近 7 が ブランド を 恵 月に 打 無 に 族 ち 理 0  $\mathcal{O}$ 正 切 事 数 都 に 直 ると 度、 で に 態 合 介昭 補 話 に が 菊 強さ 通告してきた。 合 和 L た。 華 つ 日 わ ħ せて を 本 4 見 た 彼 に 舞 も 起こって  $\wedge$ 後 女 うと 居残 0) 代 が に 経 領 過 称 る 域 営 ぎ 族 に す て な ま 0 移 る 力 住 ア

て 資 に 産 つ こ の昭 は 41  $\mathcal{O}$ 7 行 和 日 つ 訊 為 本  $\mathcal{O}$ ね 自 体 領 ら に 域 は れ 残 に た 分散 ることが な 0 で、  $\lambda$ 5 問 知 できる。 題 る 族 限 な 全体 り 7 と近  $\mathcal{O}$ こと そ の 0) 力 恵 結 は を答えて は 果だけで十分だった。 言 弱まることにな う。 ただ、 お 41 た。 美 る 鶴 だろう。 に 族 彩 が 河 そ 原 れ だ ぞ 家 が  $\mathcal{O}$ れ そ 移  $\mathcal{O}$ れ 都 住 で 合 を ŧ で 阻 移 止 美 住 す る 鶴 と 定 よう は 彩 住 河 を 原 選 唆 0 択 し 人間 た す 出 れ 資

そ の 日  $\mathcal{O}$ 夕 刻

飛 行 船 母 艦 /۱ 1 力 号 0 係 留 マ ス **|** を 離 れ た  $\Box$ サン ゼル ス 号 は 菊 華 を 乗 せ、 ゆ つ 'n き出

夕 日 に 朱 < 染 ま つ た 口 サ ンゼ ル ス 0 怪 物 は 霞 ケ 浦 を 横 切 り、 東 京 湾 を 抜 け T 西 向 か うそうだ。

美 鶴 は 近 恵 0 車 に 同 !乗して 菊 華 を 船 着 :き場 ぎ で 見 送 り、 そこで 别 れ を 済 ま せ て 41

る。

别 れ 際 近 恵と菊 華 は二人 で 何 か 話 を し 7 11 た。

フ ガ ク É hは あ れ か らすぐに 彩 泂 原 0) 家 を……」

L ŧ

自

分

0

ささや

か

な

陰

謀

とは

比

ベ

も

の

に

な

ら

な

41

想

4

0

積

み

重

ね

が、

あ

一 人 に

は

あ

る

のだろう。

7

手

を振

つ

た。

そ h な 菊 華 0 言 葉 が 漏 れ 聞 こえ た が、 詳 L 41 事 情 は 知 る ょ な

美鶴 と 近 恵 は 並 W で 鹿 島 灘 か ら 霞 ケ 浦 に 向 かう 口 サ ン ゼ ル ス 号 を 眺 8 T 11

菊 華 が 窓 か ら 手 を 振 つ て 4 る ように も見 え た  $\mathcal{O}$ で、 美鶴 は 飛 行 船 に 向 か つ

気 0 せ 11 か も L 1 な 41 が 今 は 無 性 に菊 華 نے 0 別 れ が 名 残 惜 し 11

史 実 で は 旧 昭 和 几 年 八 月 に 釆 来 し たグラ ĺ フ ツ エ ツ √° IJ ン 号 に続 < 史実 E は 存 在 L な 41  $\Box$ サ ンゼ ル ス号  $\mathcal{O}$ 

訪 は 関 係 機 関 に は 通 達 さ れ 7 41 る も 0 0) マ スコ ミで は 切、 報 道 さ れ て 41 な 41 そうだ。

来

れ で も 霞 ケ 浦 上 空に 現 れ た 第 <u>ニ</u>の ツ エ ツ ペ IJ ン 飛 行 船 を \_\_\_ 目見ようと、 か な り 0 数 0 人 々 が 近 隣 か ら 集 ま

だろう。 れ か ら

東

京

湾

を

横

断

するとな

れ

ば、

さらに

多く

の

人

々

が。

怪

物

を

目

見

ようと、

空を見上げることに

な

る

つ て

41

る。

サンゼ ル ス 号 0 船 影 が 銀 色  $\mathcal{O}$ 輝 点と な つ た 頃 近 恵 が ぼ。 つ り と言っ た。

あ 0 飛 行 船 P 母 艦  $\mathcal{O}$ 乗 組 員 は み な わ たく しと同じ 模 造 人 間 な のだそうです」

::

を 11 上 飛 口 行さ げ、 サンゼル せて 模造 41 ス号に 人間 る の を し でござい 乗 ろ 組 温員とし バ  $\vdash$ ます。 力号にし て教育 ろ、 し、 若干、 操 史実では先代領域にて処分にされるところを、 船 わ さ たく せ 7 し 41  $\mathcal{O}$ るそうです。 都 合で 飛行! 後代 経 路 を変更してい 領 域  $\wedge$ 移送す ただきま る際 有 史 世 訓 界 練 た を 領 が 域 か 連 ね 合 て 各 が 地 買

を か そうで け る し の で た の。 す か 菊 ? 華さま より 進 0 歩 ためだけ L た 世 界 に、 な ら、 船 を 呼 旧 式  $\lambda$ だ 0 わ 飛 け 行 船 で など不 は な か - 要では つ た 0 あ で り す ね ま せ : で  $\bar{h}$ か もなぜ、 あ る そ 4 は 0 ょ う も な 手 間

れたものを新造することも可能でしょうに」

美鶴の問いに、近恵は再び空を見上げて言う。

41 41 え 古 41 ŧ  $\mathcal{O}$ を 古 41 技 術 で 造 り、 運 用することに は 後 代 0 新 L 41 技 術 で 再 現することで は 得 ら れ な 41

価値がございます」

!……つまり、アンティークとしての価値、なのですね」

左様でございますね」

それは美鶴にとって、意外な発見だった。

自 分 が 仕 事 で 扱 つ 7 41 る古 物 と、 あ  $\mathcal{O}$  $\Box$ サ ンゼ ル ス 号 は 等 しく古き良きも の とし て の 価 値 が あ る。

新 L け れ ば 良 41 わ け で も なく、 古 41 か ら 価 値 が あ る わ け で ŧ な 61

良いものだから、古くても良いのだ。

有 史 世 界 領 域 連 合とい う世 . 界 そ 0 も の が、 そう 4 つ た古き良 き も の に 対 す る 需 要を満 たす た め に 存 在 す る 0 か

も し れ な 11 は る か な 未 来 0 世 界 か ら 見 た、 アン テ 1 ク  $\mathcal{O}$ 宝 庫 とし て。

同 あ じ 0 ように、  $\Box$ サンゼ 誰 ル ス か 号 が ŧ 誰 か の 美 鶴 た め が に E1 購 入し 口 ツ たの JΫ́  $\sim$ 古 か 物 も を仕 L れ な 入 ħ , , に 行 そ くのと同じように、 れ は、 彼 女 に は 縁 0 才 な 11 世 ク . 界 シ  $\Xi$ の ンで 話 か 落 も L 札 す れ る な 41 0

と

が、 その 世 界でも 同じくアンテ 1 クに 価 値 が 見い だされて ζ , るは らずだ。

そ の視 点に気づいただけでも、 今 回 0) 件 は 貴 重 な経験だったと納得すべ きな のだろう。

納得と言えば……。

「……そうです わ、 近 恵さま……もうひとつ、 う か が 41 たい ことが あ る の で す

が

「何でございましょう?」

ら に はどのてい な 昔 近 恵さま け のことを れば、 ど、 か 私に 思 が 41 過 41 あ 去 出 ら さ し のようなお言葉をかけて下さるはずも……」 が :蘇って て れ か て 41 ら 菊 た 41 ら、 華さ たのでし ま、 とて よう ず も 近恵さまと親しくできるとは 41 か ぶ ? ん と昔 さきほどの のことを 近 思 恵さ 41 出 ま さ 思え 0 れ お て ま 話 41 せ し た か 41  $\lambda$ 5 が……で ように見え 察するに、 も、 ま 昔 菊 華さま たが のことが が 完 わ 実 か 全 際

近恵は少し、寂しそうに微笑んでから答える。

す る わ ものですし、 たくしに、 複 雑 あ えて な 人の 私的 心 理 に 用 は 41 わ ようと か ŋ か は ね ます。 思い ま 電 せ 気的 ん。 菊 に 人の 華 さ んと、 心を測 こうしてふたたび 定する技術もござい お 話 ますが、 しできたことだ 公務 で 使 用

· 結び 菊 華 上と近恵 いつ てい ……二人はどれ るのだ。 そう確信 ほど仲 した美鶴 達い を は、 しようとも、 さきほど菊華 見 か に け し 0 たのと同じ 年 齢 が 大きく異 質問 をする。 な ろうとも、 心 0 深 41 部 分 で 強

近 恵 Ż ま 近 恵 さま ょ は、 亡くなったご主人と同じように、 菊 華さ まのことを大切に思ってら つ L や るの で す

わね」

で ....

わたくしには、

十分でござい

・ます」

左 そ の 様でございます!」、 言 葉に 近 恵 は 顔を ほころ ک ば せ、 力強 くう なずい て言う。

了

### 主要参考文献

William F.Althoff, SKY SHIPS, ORION BOOKS 田中新造著『飛行船の雑学』(株) グラフ社 天沼春樹著『飛行船ものがたり』NTT出版 『朝日新聞縮刷版 昭和四年八月』朝日新聞社

### #\_quickhalt\_external: ロサンゼルスの怪物ふわり

2007年5月5日 初版発行

2007年6月27日 二版発行

著 者 郁雄/吉武

挿 絵 丸山トモヲ

発行者 吉武郁雄

発行所 ★ Astronaut

Web: www.astronaut.jp

Mail: info@astronaut.jp

印刷機 CANON LBP 3300

### (C) 2007 Ikuo/Yoshitake Printed in Japan

乱丁本・落丁本はお取り替えいたします